

大リーグにおける人種・民族構成を見る

広告代理店勤務 野球評論家 篠原 一郎

大リーグにおける人種・民族構成

アメリカ大リーグの黒人選手バリー = ボンズは現在通算ホームラン数が歴代第2位であり、体調がよければ今季中に史上1位のハンク = アーロンを捕える。彼の場合は薬物疑惑もあって客観的な比較がしにくいのだが、1974年にやはり黒人のハンク = アーロンが白人のスーパースターであったベーブ = ルースが持つ当時の最多記録に迫ったときに白人ファンから受けた嫌がらせは、明らかに人種差別の要素が入っていた。ボンズは年齢と体調のこともあるのだろうが、歴代3位で迎えた2006年シーズン開幕前、「アーロンの記録は尊敬するが（つまり抜くことに固執していないが）ルースの記録はどうしても抜きたい」と語っていた。

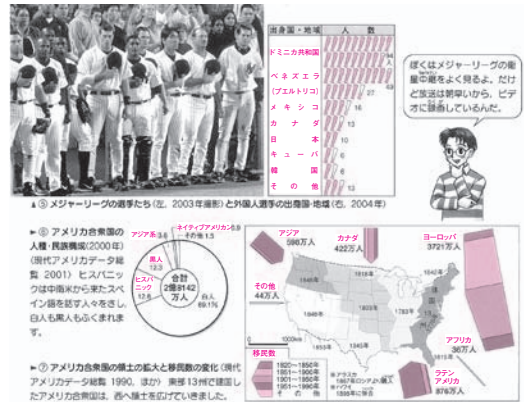
リンカーン大統領の時代になくなったはずの人種問題がいまだに宿命の病理のように横たわるアメリカ社会が透けて見える。

アメリカにプロ野球チームが発足してから140年近くになるが、この間人種に関する門戸は確実に広がってきた。

最初の80年近く、1947年にジャッキー = ロビンソンがチーム内外の迫害に耐え抜いてドジャースでデビューするまで大リーグは黒人を完全に締め出してきたのだ。

日本のプロ野球における外国人枠

一方、日本のプロ野球には長年外国人枠が存在してきた。チームにふたり以内という時代が長かったが、近年は3人に広がったり、一軍に同時に登録されるのは3人以下だが何人所属させ



「中学生の地理 初訂版」p.115

てもよいと変わったり、制限は緩和の一途をたどっている。

しかし外国人選手起用が自由になったことはいまだにない。金に糸目をつけず大リーガーをかき集めてチームを強くするような安易なことを許さないためである。

また日本では大リーグ経験者は（韓国や台湾のプロリーグ経験者も含めて）新人王の資格がないのに対して、大リーグでは野茂英雄や佐々木主浩やイチローのように日本ですでに不動の地位を築いた選手でも大リーグでは新人王を取っている。これはかえって日本に対して失礼という見方が現在アメリカでも広がっているが、それにしても、大リーグが世界のプロ野球リーグの頂点に位置することを内外が認めているということだ。つまり「格下のリーグからいくら選手を呼んできてもチームには何の有利にも働かない」という意味だ。

リーグの力が世界最強でないなら、その発展のためにはある程度外部の選手が流入するのを制限するのはしかたのないことなのである。韓

国も台湾も枠の差はあるものの同様に外国人選手の制限がある。

発展途上国が自国産業の発展保護のため品目によって輸入制限を設けるのは当然のことで、あまり非難されないのと同じだ。

アメリカより60年遅れてスタートした日本のプロ野球リーグは長年発展途上だったわけで、さらに半世紀近く後に生まれた韓国や台湾のプロ野球リーグも当初は「先進国」に大きく遅れをとってきたのだ。それを上記のような保護で自国の野球レベルを発展させ、今や日本がワールドベースボールクラシックで優勝したり、その大会で日本が韓国に負け越したり、2006年のアジア大会ではアマチュアチームとはいえ日本が台湾に決勝で敗れるという時代になるくらい、各国の戦力が拮抗してきたのである。

それにひきかえアメリカは、アメリカンドリームを体現するためにやってきた者たちを受け入れる懐が深い。そういうところは平等である。人種差別は上述したように根強く残っているようなのだが、勝利のためには国籍によって選手の扱いが違うことはない。力を落とせばアメリカ人だろうが日本人だろうが遠慮なく切られるし、実力があればどこの国から来た選手だろうがエースにも四番打者にもなることができる。2001年にイチローが大リーグ史上初の日本人首位打者となったが、2006年にはついに初めて台湾人投手王建民が最多勝投手となった。もともと移民で構成されたこの国で、大リーグはアメリカ社会を忠実に投影してきたと言えるのではないだろうか。

アメリカ社会を写す 大リーグの人種・民族構成

115ページ⑤でわかるように、大リーグの選手に外国選手が占める割合は多い。94年にはゼロだった日本人もふた桁となりドミニカとベネズエラとメキシコなど中南米出身の選手も多い。ヨーロッパからの移民の子息は20世紀前

半には多かったが、今ヨーロッパ国籍の大リーガーもほとんどいなくなった。

大リーグは、こうしてアメリカの社会を直接間接に反映してきたけれども、近年、経済すなわちスポーツビジネスと無関係でいられなくなっている。

ロビンソンの大リーグデビューを推進したドジャースは、1980年代以降、ビジネスの観点を選手獲得の要素にしている。つまり、ドジャースがロサンゼルスに移転して20年以上が経ちこのエリアにメキシコ人、韓国人、そして日本人の人口がふえたことにも着目し、バレンズエラやバルデス、バク、そして野茂を積極的に登用するようになった。彼らが登板する日は観客もふえ、グッズも飛ぶように売れ、彼らの出身国からの放送権収入もあり、ドジャースに大きな利益をもたらした。

1947年にたったひとりで始まった黒人選手の比率は74年のピーク時には26%まで行ったが98年には14%に下がっている。一方、ラテンアメリカからの選手は1950年にはわずか4%だったが2000年に20%を超え、大リーグの選手で最も多い姓はスミスやウィリアムスではなくマルチネスであるという時代になったほどである。

1960年代の公民権運動など黒人をめぐる人種・民族差別問題に悩まされたアメリカは、大リーグでの人種・民族構成を鏡に映すように、黒人の比率が減ると入れ替わってふえてきたラテンアメリカからの移民問題が起きるようになっていく。図⑥から、アメリカ社会も都市部でヒスパニックの人口構成比は明らかに上がっており、大リーガーの人種・民族もそれと相乗作用で変化しているのがわかる。

今後もビジネスつまり経済と社会とスポーツが複雑に絡み合っていてアメリカは変化をしていくはずで、それを見逃すことができない。(文中敬称略)

出典 『アメリカン・ベースボール』日経ナショナルジオグラフィック社